

単称思想と見知り

大川祐矢*

1. はじめに

我々は様々なものについて思考し、様々な内容を持った思想 (thought) を抱くことが出来る。そうした思想内容の言語的表現は、構造的で、真偽判別が可能な、命題の形式をとっているとされる。そうした命題もまた様々な形式を持っているが、それらは大きく二つの種類に分けられる。一つは単称命題 (singular proposition) であり、もう一つは一般命題 (general proposition) である。単称思想 (singular thought) とは、その言語的表現が単称命題であるような思想のことであり、*de re thought*、あるいは *purely referential thought* などとも呼ばれるものである⁽¹⁾。

単称思想に関する論争は、古くはフレーゲやラッセルにまで遡ることが出来るが、昨今、学際的な研究の視座から、それに関する論争が再燃し始めている⁽²⁾。本稿ではそうした事態を受けて、単称思想についての若干の議論状況をサーヴェイしたい。とりわけ本稿で見たいのは、単称思想に関する認識論的な論争である。すなわち、単称思想を抱くための認識論的な必要条件は一体何であるかに関する論争である。一つの候補として有力なのは、ラッセルによる「見知り (acquaintance)」関係である。それを踏まえ、本稿では、ラッセルの見知りについて肯定的であった主要な論者としてエヴァンズ、否定的であった主要な論者としてカプランを取り上げ、論争の中心的な争点がどこにあるのかを考察したい。

以上の論点を受けて、本稿では以下のような構成で議論を進めていく。まず次節では、単称思想を保持する必要条件として何故見知りが考えられたのかを、そうした見解の発起人であるラッセルの議論を概観することで確認する。またその際、ラッセルの議論そのままではどういった点が問題となるのかも見る。続く第三節では、その見解に肯定的な論者としてエヴァンズを紹介し、彼がラッセルの見知り説のモチベーションを継承していること、またその上でラッセル的な見解に理論的な擁護を与えたことを確認する。続く第四節では、見知りに対して否定的であった論者としてカプランを取り上げ、彼が見知りの代わりに与えた必要条件を見る。最後の第五節では、それ以外の論者により展開された議論をごく簡単にであるが素描する。

2. ラッセルにおける見知りとその問題点

この節では、Russell (1905) および Russell (1910) で展開された、ラッセルの見知り説を素描するとともに、その問題点を確認する。

前節で確認したように、単称思想とはその言語的表現が単称命題であるようなものであり、例えば「このネコは可愛い」などがそうである。ラッセルはそうした思想を人が抱くためには、当該の対象を見知っている必要があると考えた。例えば「このネコは可愛い」であれば、「このネコ」により指示される対象を見知っている必要があると考えられたのだ。ところでラッセルにおいて見知りとは、端的にそれを知覚しているのみならず、その知覚が誤りえないということが要求される⁽³⁾。それは、幻覚や見間違い等を排斥し、正確な判断論を成立させるための要求である。しかし、このように考えると、かなり奇妙な結論が導かれてしまう。というのも、一般に「知覚されている」と呼ばれる多くの対象に対して、我々は誤りえてしまうからだ。つまり、先の「このネコ」であれば、もしかしたらそれは風に舞うビニール袋であるかもしれないし、そもそも単なる幻覚である可能性もあり、結果としてそれは、ラッセル的には見知られていると考えることは出来ない、ということになってしまう。つまり、「このネコは可愛い」という思想は、「このネコ」に対して見知りが成り立たない以上、真正な単称思想とは言えなくなってしまうのである。

では、真正に見知りの対象となりうるものは一体何なのか。それは、ラッセルによるとセンスデータのみである。何かを見たり聞いたりしたときに（例えそれが幻覚や幻聴であったとしても）、我々はそれに対して何らかの印象を持つ。そうした印象に対して幻覚や見間違い等はある得ないため、それらを見知っていると我々は考えることが出来る。それ故、真正の単称思想を抱ける対象も、センスデータに限定されることになる。

このようにラッセルは、見知りという認識論的な条件をかなり厳格に規定した。その結果、その対象はセンスデータなどの限られたものに制約され、通常「対象」と呼ばれるものの多くは、そのカテゴリーから除外されることになったのである。それ故に、真正の単称思想もまた、その範囲がかなり限定されたものとなってしまう、結果として我々の思想の内、外的な世界に関するそれは記述思想（すなわちその言語的表現が一般命題である思想）であり、見知りの対象となりうる内的なセンスデータに対してのみ、単称思想が抱かれると考えられたのである。

しかし、こうした結論に対しては反論も多く成されている。例えば、著名なのは Chisholm (1942) における「斑模様の鶏 (speckled hen)」の話である。その議論を簡単

に要約すると、斑模様の鶏に対し我々は知覚的な経験をするが、その斑点が正確にいくつあるかを述べることは出来ない。だが、先の議論によれば、我々はこうしたセンスデータに対して誤りうることはないはずである。すなわち、斑点の数がいくつあるのかが、それをセンスデータとして持っている以上、正確に分からなければならない。チザムはこのように議論し、センスデータに対して我々が見知り関係に立てるという議論そのものが誤りであると主張する⁽⁴⁾。この反論で言われているように、ラッセルの厳格すぎる認識論はそもそもセンスデータにすら成り立たない。つまり、ラッセル的な見知り説をそのままに受容すると、我々はいかなる対象に対しても単称思想を抱く認識論的な要件を満たせないことになるのである。

以上から、単称思想に関わる論者には大別して二つの選択肢が与えられていることになる。一つは、ラッセルの見知りの議論を、外的世界の対象もその範疇に含められるように拡大あるいは再解釈する方針である。仮にそれが成功すれば、見知り説のモチベーションを維持しながらも外的な世界に関する単称思想を擁護することが出来る。もう一つの方針は見知り説を完全に捨て去り、新しい理論を提唱することである。もちろんその理論は外的世界の対象に関する単称思想を擁護出来るものでなければならない。以降で見ていくように、前者の方針をとったのがエヴァンズであり、後者の方針をとったのがカプランである。その相違を、単称名の指示に関する見解の相違において確認していこう。

3. エヴァンズの見解

上述のように、ラッセル的な見知り説のモチベーションを引き継いだ論者としてエヴァンズが挙げられる。Evans (1982) において彼は、「ラッセル的単称名 (Russellian singular term)」のステータスを擁護することを試みている。その背景には、ラッセルの見知り説と共通のモチベーションがある。以下でその内実を確認しよう。

3.1 ラッセル原理とその一般化にまつわる問題

エヴァンズは、昨今の哲学者達の多くに支持される指示の理論は、基本的にはラッセル的なものであると語る。それは、指示のあり方（あるいは、対象についての思考の仕方）として、次の二つの様式を認める考え方だ。

- 記述を経由してその対象について思考する様式。
- より直接的に、直面する対象について思考する様式。

単称名が用いられるのは、主として後者の様式においてであり、特に、話し手と聞き手の両方が、対象とそうした関係にあるときである。そして、後者の様式が起こるの

は、主として対象を知覚しているときである。エヴァンズは、ラッセル的な指示の理論を支持する哲学者達は、ラッセルのこうしたアイディアも引き継いでいると述べる。

こうした状況を踏まえてエヴァンズは、次のような原理を「ラッセル原理 (Russell's Principle)」として提示する (*ibid.* p.65)。

■**ラッセルの原理** 主体は、彼がどの対象に対して判断を下そうとしているかを知らない限り、何事かに対して判断を下すことが出来ない。

エヴァンズによれば、この原理を満たすために主体に要請されるのは、次のような判別知識 (*discriminating knowledge*) である⁽⁵⁾。

■**判別知識** 主体が、他の全ての対象から、彼が判断を下そうとしている対象を判別するのに必要な知識。

エヴァンズによれば、先のラッセル的なアイディアを支持する論者達にとり、こうしたラッセル原理を一般化することが一つのタスクとなる。しかし、次のような問題から、その進行は妨げられてしまったという (*ibid.* p.66)。

その問題は、特に信念報告文についての研究の下で語られる。その研究とは、*de re* 信念報告文 (対象についての信念報告文) と、それ以外の *de dicto* 信念報告文の区別に関するものである。前者の形で報告される信念を維持するためには、その信念が持たれる当該の (指示) 対象に対し、適切な「直接的」仕方で指示を行い、また理解することが必要条件とされる。ところがバージが Burge (1977) で主張したように、そうした研究に携わる多くの論者達から、それを満たすとされる諸々のケースは真正に統一的なものではないという結論が出されたのである。バージによれば、適切な直接的仕方の典型例は、主体が対象を知覚している状況である。しかし、実際のところ、知覚関係にないもの、すなわち過去の記憶や未来に対する信念も、*de re* 的な仕方で報告することが可能である。それ故に、知覚関係を典型例としつつ、それら全てを包含するような一般的説明は存在しないとされたのだ。

こうした問題点を提示しつつも、エヴァンズはラッセル原理の一般化は可能であると考え。それは、ラッセル的単称名を擁護することによって実現されるという。次節では、それがいかにしてなされたかを見よう。

3.2 ラッセル的単称名の擁護

ここではエヴァンズによりラッセル的単称名がいかにして擁護されたかを確認する。

エヴァンズの戦略は次のようなものである。すなわち「思想がそれについて保持される対象が存在しない場合、ラッセル的な単称名を含む文に典型的に伴うような類いの思想はありえない、ということを示すことで、ラッセル的な単称名のステータスを

擁護する」(Evans, 1982, p.71) というものである。

エヴァンズは、この戦略を次のようにして実行する。まず、ラッセル的な単称名を以下のように定義する。

ある単称名がラッセル的単称名である。

iff

それが指示対象を持たない場合、それを含む文を発話する人は何も言っていない（すなわち、その発話の聞き手が何も理解しない）ような単称名である。

こうしたラッセル的単称名を擁護するためには、次の二点を示すことが必要となる (*ibid.* p.72)。

- (1) ラッセル的な単称名を含む文を理解するためには、聞き手が特定の種類の思想を抱く必要があること。
- (2) 必要とされた思想がラッセル的なもの、すなわち（指示）対象が存在しなければ保持されえないものであること。

エヴァンズはこうした戦略の概要を、特に直示的単称名（「このカップ」や「木の下あの男」）について記述している。それは次のようなものである。

まずエヴァンズは、これについて (1) を示す。こうした直示的単称名が用いられる場合、その指示対象についての「直示的思想」を聞き手が持つことが、その際に言われていることを理解する必要条件になると言う。ここでいう「直示的」とは、主体が現在その対象を知覚しているということに決定的に依存した仕方で、ということである。そのため、例えば「あのカップは F である。」という文の通常の使用が理解されるのは、聞き手が (i) そのカップを知覚しており、さらに (ii) その知覚に依存した仕方で、「話し手が言及しているあのカップは F である」と考える場合のみであることになる。直示的単称名を含む文の理解を聞き手が理解する場合には、確かにこの二つの要件が満たされる必要がある。すなわち、聞き手はある特定のタイプの思想、この場合は直示的思想を抱いている場合のみ、当該の文を理解すると考えられる。これにより (1) が示された。

さらに彼は次のようにして (2) を示す。まず彼は次の二つの事柄の内、一点目を自明なこととして挙げ、そこから二点目を導出する (*ibid.* p.73)。

- ある人が幻覚を抱いていると想定する。そのとき我々は、彼が知覚していると思いついていて対象に関する彼の思想を「彼は x について、それが F であると考えている」のような仕方（直示的な仕方）では記述しない。
- 主体が確かにある対象を知覚している場合は、特定のタイプの内容を持つ思想

を彼は抱くことが出来る。一方で、主体が知覚する対象が存在しない場合は、そうした内容を持つ思想も存在しない（直示的な仕方での思想の記述が不可能であるから）。

直示的単称名を含む文の理解に必要とされるのが、この特定のタイプの内容を伴う思想、すなわち直示的思想であるため、この二点から次が導出される。すなわち、そのような単称名が、実際に使われた場合に指示対象を持たないのであれば、話し手が言ったこととして理解されるものはなにもない。何故なら、聞き手により直示的思想が保持されえないからだ。そのため、この単称名はラッセル的なものであると言える。

3.3 単称思想との関わり

以上のようにして、エヴァンズはラッセル的単称名のステータスを擁護したのであるが、ここには単称思想に関する彼の見解が端的に現れている。すなわち、彼にとっての単称思想とは、まさしくラッセル的単称名を含んだ文により表現されるものであり、さらに話し手によるその発話を聞き手が理解するためには、聞き手が直示的思想を抱くこと、すなわちラッセル的単称名により指示される対象に対し、ラッセル原理を満たすことが必要とされる。

ここに見られるのはラッセル的な見知り説が持っていたモチベーションをエヴァンズが確かに継承しているということである。というのも、ラッセル的な単称名を認めないということは、あらゆる単称名が指示対象以外の「意味」、例えば記述的な表現に置き換えられるということを確認するということであるからだ。先の定義の通り、ラッセル的単称名とは、指示対象が存在しない場合、それを含む文を理解出来ないような単称名のことである。それを認めないということは、どのような単称名であれ、その指示対象が存在しなくとも、それを含む文を何らかの仕方理解出来るということになる。それが可能であるためには、いかなる単称名であれ、指示対象以外の「意味」を持たねばならないということになろう。故に、そうした置き換えが不可能なラッセル的単称名を擁護することは、まさしく単称思想固有の領域を認めているということであり、さらに、見知り説と同質の、直接知覚している（判別知識を持ちうる）対象についてのみそれを保持出来るという、認識論的な基準を導入しているということである。

もちろん、エヴァンズの基準はラッセルの見知りをそのまま受け入れたものではない。それを外的対象にまで拡張し、直接的な知覚関係へと拡大したものとなっている。そしてそれに関する原理をラッセル原理と名付け、それを一般化することで理論的な擁護を与えようとしたのである。エヴァンズはそうにして見知り説のモチベーショ

ンを引き継ぎつつ、それを外的対象との直接知覚的關係へと改良することによりそのドメインを拡張したのである。

4. カプランの見解

次に見知り説をほとんど考慮しないカプランの見解を見てみよう。Kaplan (1989b) によると、彼は *dthat* を用いることで任意の単称名を直接指示的な単称名に変換出来ると考えた。これはつまり、*dthat* を用いることで、その単称名の指示対象について単称思想を抱けるようになるということである。Jeshion (2010b) はこうしたカプランの見解を、様々な単称命題に対して命題的態度を可能にするのは、対象に対する我々の見知りの形式ではなく、直接指示のための概念的な道具を操作する我々の能力である、という点から、意味論的道具主義と呼んだ (*ibid.* p.118)。ここではカプランの *dthat* がどのような考えであるのかを概観しつつ、単称思想を保持する基準として、それがどのような形で用いられるかを、特に指示的意図との関わりの下で概観しよう。

4.1 *dthat* について

先にも述べたように、*dthat* とは、ある任意の単称名を直接指示的な単称名に変換する役割を持つ指標のことである。いかにしてその変換がなされるかという、それは単称名に関するパラメータを増やし、それを埋めることによってである。増やされたパラメータは、可能世界と時点である。例えば、“*dthat*[a]”の指示対象は、ある文脈 *C* (これは可能世界 w_c と時点 t_c から成る) における“a”の指示対象であるとされる。確定記述に対しても同様のことが言える⁽⁶⁾。

このように考えると、あらゆる単称名の指示対象は、文脈 *C* を特定することによって固定することが出来るようになる。仮に *dthat* 表現の導入が、見知りによる認識論的な制約を受けないとすると、単称思想を抱く基準として見知りを導入する必要性がなくなることになる。というのも、ある単称名を含む命題について、その単称名に *dthat* 表現を導入し、そのパラメータを特定することによって、それが帰属される対象を同定することが可能になるからだ。

そうすると次の問題は、*dthat* 表現の導入が何に制約されるのかである。明示的に述べられてはいないが、その候補として指示的意図が挙げられると考える。その議論を次で見てみよう。

4.2 指示的意図について

指示的意図とは読んで字のごとく、ある言語表現によって何かを指示しようという意図のことである。先にも述べたように、*dthat* 表現の導入とは、単称名や確定記述

を、直接指示的な表現に変換することである。それ故に、その導入には、そうした表現で何か特定の対象を指示しようという意図がなければならないと考えられる。この指示的意図の問題が特に言及されるのは、特に Kaplan (1989a) で、直示の問題に関してである。

その問題は、直示には指示的意図のみで十分か、それともデモンストレーション（指差し等）が必要か、というものであった。カプランは前者のみで十分であるという議論を提示している。その議論では見知りが必要か否か等という点は全く考慮されていない。本質的なのは「何かを指示しよう」という意図であり、例えばその意図の対象が誤っているが、あるいは存在していなかろうが、思考者は何らかの対象を指示していると考えられる。そして彼が何らかの対象を指示していると考えられる以上、その人はその対象に対して何らかの単称思想を抱いていると考えられるのである。仮にカプランがラッセル的な見知りの基準を採用していたならば、指示的意図のみでは不十分であると考えられただろう。何故なら、指示的意図は誤りうるものであり、ラッセル的な見知り説を充足するものでは全くないからだ。

しかし、指示的意図が誤りうるすると、実際には指示が成功していない、つまりその対象に対し単称思想を抱き損なっていると考えられる場面があることも事実である。例えば、直示には指示的意図のみならず、デモンストレーションが不可欠であると考えた Reimer (1991) によって、次のような反例が提出されている⁽⁷⁾。

■反例 話し手が「これは私の鍵だ」と発話することで自分の鍵を指示しようと思図した際に、話し手は手に持っているのが自分の鍵だと思っていたのだが、実際は同僚の鍵であるような状況。

この場合、話し手は「自分の鍵」を指示しようと思図しつつも、実際にはその意図は充足されず、むしろデモンストレーションによってその意図が覆されているとライマーは主張する。つまり、この状況では指示決定を担うのは意図ではなく、デモンストレーションであることになる。

しかし、Bach (1991) では、次のように考えればカプランの見解を擁護することが出来ると論じられている。すなわち、

■応答 話し手は自分の鍵を指示することを意図していたとしても、同僚にその意図を認識させることを意図していた訳ではない。話し手が同僚に認識させようとしていた意図（つまり指示的意図）とは、自分が持っているものを指示しているという意図である。そのため同僚は、話し手が「これ」という語を用いることで指示しようとしていたものを、話し手の鍵ではなく、話し手が持っているも

のと同定する。

ここに見られるのはグライスの仕方で意図の分類である。つまりバックは、話し手が伝えようとする内容に関わる意図と、話し手が実際に聞き手に認識してもらおうとしている意図を分けて考えているのである。この場合だと、「自分の鍵を指示しようという意図」が前者にあたり、「「これ」という語を用いることで手に持っている鍵を指示しようという意図」が後者にあたることになる。そして、後者の意図こそが聞き手に認識させようとしていた意図であり、すなわちカプランのいう指示的意図にあたることになる。

この議論は本稿の趣旨から外れてしまうのでこれ以上議論しはしないが、いずれにせよ重要なのは、カプランが、指示の成功にはデモンストレーションは不要であり、指示的意図のみで十分であると考えていた点である。ここにはその対象を見知っていないなければならない、というラッセル的な認識論的制約は全く含まれていない。それ故に、彼にとっての単称思想の基準とは、見知りではなく、用いる言語表現で何かを指示しようという意図を持つか否かであることになる。そうした意図を持っていれば指示的な表現はもちろん、単称名や確定記述も直接指示的な表現と見なされ（すなわち *that* 表現が導入され）、それを含む思想は単称思想だと考えられる。一方で、そうした意図を全く持っていない場合、そうした思想は記述思想として保持されることになる。このようにしてカプランは、単称思想を保持する基準としてラッセルの見知り説とは全く別のものを提示したのである。

5. その他の立場

これまで単称思想に対する見知りの肯定派としてエヴァンズ、その否定派としてカプランの議論を概観してきた。ここではその他の論者による議論をごく簡単に見ておきたい。

5.1 バックの議論

まず最初に紹介するのはバックである。彼は Bach (2010) において、単称思想を抱くためには当該の対象を見知っている必要があるという、ラッセルを擁護する見解を展開している。とは言え、もちろん、ラッセルの議論そのままの形で見知り説を採用している訳ではない。彼は *de re* / *de dicto* に対するクワインの区別を批判し、*de re* 表象という新たな概念を持ち出すことで、見知りのドメインを拡張しようとする。

クワインによる *de re* / *de dicto* の区別とは、信念報告文の表現形式による区別であり、Quine (1953) においてその議論が展開された。大雑把にまとめるとその議論は、

de re 的な信念報告文は「A は *o* に対して *p* という信念を抱いている」であり、*de dicto* 的な信念報告文は「A は *o* が *p* であるという信念を抱いている」という形式を一般にとり、それによって信念に関する *de re* / *de dicto* の区別が判別されるというものである。しかしバックは、このような報告文の形で *de re* / *de dicto* の真正な区別をもたらすことは出来ないと考え、ある命題が *de re* 的であるのは、思考者が当該の対象に対して *de re* 表象を持っている場合であると主張する。

バックによると、ある対象に対する *de re* 表象は、その対象を間接的・直接的に知覚しているか否かに関わらず、持ちうるものとされる。つまり、*de re* 表象は、思考者の直接的な知覚のみならず、他者とのコミュニケーションや、単に読んだり聞いたりすることでも持たれうるものであり、そうした各々の場合に、われわれは単称思想を抱くことが可能であると彼は考える。言い換えると、こうした *de re* 表象は人から人へ伝播するものであり、それを持つ者は誰であれ、単称思想を抱くことが出来るということになる。つまり、*de re* 表象とは、見知りの対象となっている表象なのである。

バックはこのような形でラッセルの見知り説を擁護しつつ、そのドメインを拡張しようとした。とは言え本人も指摘しているように、*de re* 表象の実質に関する議論はまだ不十分であり、それが知覚以外の仕方を持たれうるという点に関しても、理論的な正当化を施す余地が残されているように思われる。

5.2 レカナティの議論

次に、同じく見知り説肯定派の論者としてレカナティを取り上げよう。彼は Recanati (2010) において、先のバックよりも、より見知り説にシンパシーを寄せる「見知り愛好家」という立場から議論を展開している。彼は思想を記述的なものに限る立場を「記述主義」と呼称し、単称思想を認める「単称主義」が「記述主義」よりも妥当な理論を展開出来ると主張することで、その優位性を示そうとする。またレカナティはこうした記述主義者の中でも、ラッセルの見知り説の非妥当性から単称主義を批判する論者達を反見知り論者として攻撃の対象とする。その議論の大枠は、反見知り論者の批判が、的外れなものであることを主張するというものである。本稿での関心は単称思想と見知りにあるため、後者の、反見知り論者への再反論にスポットを当てることにする。

まず彼は、フレーゲによる意義と意味の区別を受け入れることから始める。通常、見知りという基準を提示して、単称思想の余地を残そうとしたラッセルと違い、フレーゲはその二元的な意味論を提案することで、あらゆる単称思想は記述的思想に置換出来ると主張したとされる。しかしレカナティは、フレーゲ的な意味論は単称思想の

擁護に十分利用出来ると主張する。彼は「意義」と称される「提示の様式 (mode of presentation)」は、全てが記述的なものでは必ずしもないことを主張し、そうしたものを「メンタルファイル」と呼んで区別する。そして、このメンタルファイルは個々人の認知的環境や言語的知識に依存して変化しうるものであり、かなり主観的な内容を持つものとされる。例えば、「富士山」に対して、「日本一高い」といった客観的な内容ではなく、「自分が一番好きな山」などの主観的な内容が含まれるものである。そしてそれは対象との「見知りの関係」を通じて獲得されるものであるとされる。

重要なのは、この「見知りの関係」が実際的なものである必要はない、という点である。つまり、ラッセルほど厳格に規定された見知り関係にある必要はなく、原則的なものであって良いのである。ラッセルの見知り説があまりに厳格過ぎ、それ故に失敗したのは、実際的な見知り関係を要求したからである。しかしレカナティは、それほど強いものを要求する必要はないと考えたのだ。これが許されるのは、メンタルファイルはその内容が必ずしも真である必要がないからである。それらは誤っていても構わないし、あるいは同一の対象に対して異なるメンタルファイルを抱いていても良いのである。それが許されるのは、メンタルファイルが客観的に共有可能な記述だからではなく、あくまで主観的なものに留まるからである。仮に誤った内容のメンタルファイルを持っていたとしても、それが帰属される対象に対し、我々は何らかの単称思想を抱くことが可能であるのは確かである。

このように、ラッセル的な見知り関係を、ある対象に対して何らかのメンタルファイルを持つことだと解釈するならば、純粋なラッセル的な見知りになされていた反論、すなわち、外的世界の対象を見知ることは不可能である、という反論は、かなりの外れなものであると考えられよう。このようにしてレカナティは反見知り論者に対する再反論を行い、それを無効化しようとしたのだ。

6. おわりに

本稿では単称思想と見知りにスポットを当て、それにまつわる若干の議論を紹介してきた。そこには様々な立場や見解が入り乱れているが、一つ確かなのは、見知り説を擁護する者であれ、それを不要とする者であれ、ラッセルが提案した厳格な見知り説に対しては誰しもが否定的である、ということだ。そのため、何らかの仕方ですそれを拡張するか、あるいは全く異なる観点から基準を導入するか、そのどちらかが必要となってくる。おそらく、この議論に最終的な決着を付けるためには、本稿で取り上げたような、純粋に理論的な議論に加えて、経験諸科学の成果を鑑みることが不可欠であろう。今後はそちらの観点からのアプローチにも挑戦したいところである。

註

* g630247@gmail.com

- (1) 単称命題とは、Russell (1910) および Jeshion (2010a) によれば、その構成要素として個体や性質を含んでいる命題のことであり、ラッセル的には、後で見る「見知り」関係がそれを保持する前提となる。
- (2) 具体的にどういった分野において論争が活発化しているかは Jeshion (2010a) を参照。
- (3) より正確には、ラッセルが見知り関係が成立しうる対象として考えたのは、それ以上分析することの出来ないような固有名の指示対象である。それ以上分析が不可能であるが故に、その指示対象は常に固定され、それゆえ認識論的には誤りえないものとされる。Cf. Russell (1910)。
- (4) この議論は Tye (2009) において更に洗練されている。
- (5) この箇所では ‘discriminating conception’ と表記されているが、ch.4 以降では ‘discriminating knowledge’ で統一されているため、本稿でも「判別知識」とする。
- (6) ここでの表記は Soames (2010) を参考にした。
- (7) 他二つの反例が提出されており、それらに対してもバックは応答を試みているが、カプランの指示的意図の考え方を知る上では、ここで提示したもので十分と考えたため、割愛した。

文献

- Bach, K. (1991). ‘Paving the Road to Reference,’ *Philosophical Studies*, 67, 295–300.
- (2010). ‘Getting a Thing into Thought,’ in Jeshion, R. ed. *New essays on Singular Thought*: New York: Oxford University Press, 2010, 39–63.
- Burge, T. (1977). ‘Belief *De Re*,’ *Journal of Philosophy*, 74, 338–362.
- Chisholm, R. (1942). ‘The Problem of the Speckled Hen,’ *Mind*, 51, 204, 368–373.
- Evans, G. (1982). *The Varieties of Reference*: Oxford: Clarendon Press.
- Jeshion, R. (2010a). ‘Introduction to New essays on Singular Thought,’ in Jeshion, R. ed. *New essays on Singular Thought*: New York: Oxford University Press, 2010, 1–36.
- (2010b). ‘Singular Thought: Acquaintance, Semantic Instrumentalism, and Cognitivism,’ in Jeshion, R. ed. *New essays on Singular Thought*: New York: Oxford University Press, 2010, 105–140.
- Kaplan, D. (1989a). ‘Afterthoughts,’ in Almog, J., Perry, J., & Wettstein, H. eds. *Themes from Kaplan*: New York: Oxford University Press, 1989, 565–614.
- (1989b). ‘Demonstratives,’ in Almog, J., Perry, J., & Wettstein, H. eds. *Themes from Kaplan*: New York: Oxford University Press, 1989, 481–563.
- Quine, W. V. (1953). ‘Quantifiers and Propositional Attitudes,’ *Journal of Philosophy*, 53, 5, 177–187.
- Recanati, F. (2010). ‘Singular Thought: In Defence of Acquaintance,’ in Jeshion, R. ed. *New essays on Singular Thought*: New York: Oxford University Press, 2010, 141–190.
- Reimer, M. (1991). ‘Demonstratives, Demonstration, and Demonstrata,’ *Philosophical Studies*, 63, 187–202.
- Russell, B. (1905). ‘On Denoting,’ *Mind*, 14, 56, 479–493.
- (1910). ‘Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description,’ in Russell, B. ed. *Mysticism and logic, and other essays*: London: Longmans, Green, 1917, 209–232.
- Soames, S. (2010). *Philosophy of Language*: Oxford: Princeton University Press.
- Tye, M. (2009). ‘A New Look at the Speckled Hen,’ *Analysis*, 69, 21, 258–263.

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕